

ポスターセッション (P-水環境-17～P-水環境-31)

本セッションでは、干潟の藻場の底質環境に関する研究(吉田ら)、バイオアッセイによる化学物質影響評価に関する研究報告(渡辺ら、中村友紀ら、中村省吾ら)、貝類中のダイオキシン類濃度に関する研究(日下ら)、水系の化学物質のリスク評価に関する研究(石川ら)、集水域や大気からの汚濁負荷量把握に関する研究(田中ら、奥川ら、篠宮ら、植田ら)、植物・微生物等の自然浄化機能を利用した水質・底質浄化方法に関する研究(谷本ら、江田ら、増木ら、松尾ら、阿部ら)の報告があった。バイオアッセイによる毒性試験、生物濃縮係数の研究は、基礎的で重要な研究であり、このような基礎的なデータの蓄積がなければ化学物質のリスク評価はできない。国立の研究機関、大学等の関係研究機関において、今後も継続的にこのような基礎的データが蓄積・発信されることを期待したい。産業技術総合研究所化学物質リスク管理研究センターで作成されている化学物質のリスク評価モデルは、プロトタイプであるが集水域規模での化学物質の管理を考える上で示唆に富むものであった。ホームページで研究内容が紹介されており、関係の研究者には参考になると思われる(<http://www.riskcenter.jp/SHANEL/>)。集水域からの汚濁負荷量に関しては、最近、自動採水器や自動観測機器の普及によって頻度の高い詳細な調査が実施できるようになってきた。しかし、調査データが散在し、一部は非公開となっており、貴重なデータであるにも関わらず有効に利用できる状態となっていない。汚濁負荷量の調査結果に関するデータベースを国レベルで整備し、随時更新できるようなシステムを作る必要があるのではないかと思われる。また、負荷量調査に加えて湖沼や海域などの負荷を受ける水域における水質への影響評価調査も重要である。一般に年間総負荷量で水質への影響を評価してしまう場合が多いが、実際はそのように単純ではない。負荷量を詳細に把握するだけでなく、負荷を受ける水域の水質影響を考慮した負荷量の評価方法の開発が必要と思われる。

(滋賀県琵琶湖・環境科学研究センター 大久保 卓也)